

徳大がALS治療

延命期待の「メチルコバラミン」

徳島大大学院医歯薬学研究部の梶龍児教授（神経内科）らの研究グループは7日、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者の延命効果が期待される薬剤「メチルコバラミン」の治療を、医師主導で始めたと発表した。実用化されれば平均余命を600日以上延長させる可能性があるとされており、梶教授は「新薬開発を実現するためにも、多くの患者に参加してほしい」と呼び掛けている。

発症後1年以内が対象

ビタミンB12の一種 発症後3年以内のALS患者を対象に実施した。重篤な副作用があるメチルコバラミン患者を対象に実施した。一方で延命効果の治験は、製薬会社 例があり、同社は2果もみられなかった。エーザイが約7年間、015年に結果を公表が、発症後1年以内の

被験者に限れば、600日以上、生存期間または呼吸器装着までの期間が延長することが実証されたとした。今回の治験は発症後1年以内のALS患者を対象に、主管施設の徳島大病院を含む全国の19施設で行う予定。適性検査を経た上で、被験者をメチルコバラミン50錠投与と、プラセボ（偽薬）投与の2

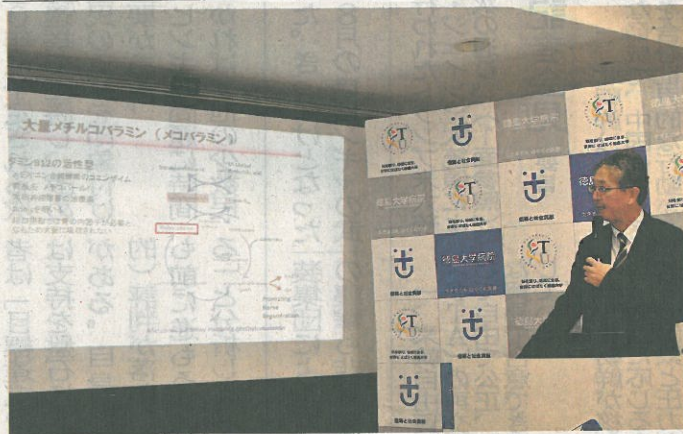
グループに分け、それぞれ4カ月間にわたり週2回、筋肉に注射し、症状の進行を比較、検証する。被験者数は128人を目標とし、19年9月

までに登録してもらう。メチルコバラミンは既存の治療薬との併用が可能。被験者は希望すれば最長で20年3月まで投与が継続される。その場合は本人と

家族による注射もでき導する徳島大病院の和泉唯信・治験調整医師（神経内科）が7日、東京都内で記者会見し「治験が成功するよう、スタッフ全員で全力で取り組みたい」と意気込みを語った。

治験は企業が製品開発を目的に行うケースが一般的で、医師主導による治験は珍しい。徳島大病院が主管施設として実施するのは初めて。17年度から3年間、日本医療研究開発機構（AMED）から3億円の助成を受ける。

梶教授と、治験を主導する徳島大病院内の事務局長（電088（633）9658）。（笠井理）



メチルコバラミンの治験について説明する 梶教授—東京都内

ALS 脳からの命令を筋肉に伝える運動神経細胞が侵される難治性の神経疾患。発症すると全身の筋力が低下し、やがて呼吸不全となり、人工呼吸器を装着しなければ平均約3年で死に至る。国の指定難病で、1年間の有病率は人口10万人当たり約2〜7人とされる。発症原因は不明で、これまでに100種類以上の薬剤が治験されたが、平均余命を約90日延長する内服薬「リルゾール」と、症状をやや改善する点滴剤「エダラボン」の2種類のみ承認されている。